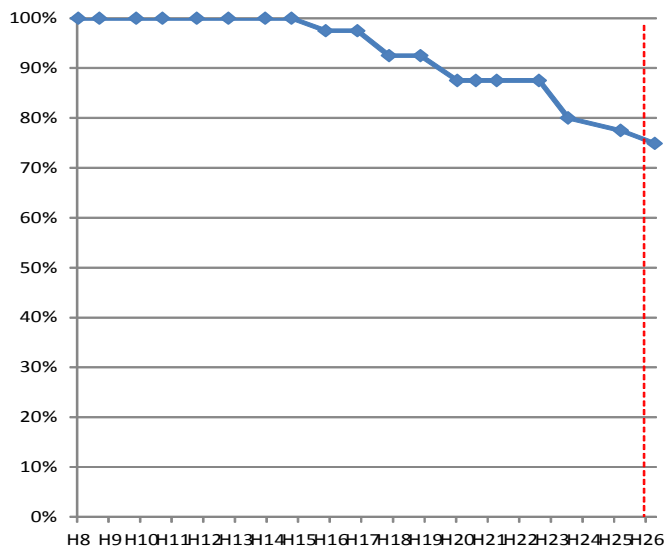


樹種名	イスノキ（別名：ヒョンノキ）	
科 目	マンサク科	
学 名	<i>Distylium racemosum</i>	
分 布	日本では関東以西、四国、九州、琉球列島に産する。関東、四国、九州では低地の森林によく見かける。国外では済州島、台湾、中国に分布する。	
樹木特性	暖地の森林に生える代表的な樹木のひとつであり、カン類と混生して照葉樹林を構成することも多い。幹は少し赤色がかかり、独特の樹肌の模様となる。葉はあまり特徴のない形で、厚みがあり、光沢が強く、虫えいができるので有名である。	
用 途	材は堅く強靱で以前は算盤の玉に、現在は床材・床柱に利用。心材は黒いので紫檀や黒檀の代替材として利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	207 本／0.10ha (2,000 本／ha)	
特 徴	【樹 形】 常緑高木であり、樹高は約 20m 程度となり、樹皮は灰白色。大木になると赤っぽくなる。 葉は厚く長楕円形で互生、深緑で表面に強いつやがあり、4 月頃、葉腋に小花を総状花序につける。花序の基部には雄花、先の方には両生花がつく。花弁はなく、萼も小さいが雄しべの葯が赤っぽく色づくのが美しい。ただし見られる時期は短い。葯は乾燥すると裂開し、花粉は風によって飛散する。 果実は表面が黄褐色の毛で覆われ、先端に雌蕊が二裂した突起として突き出すのが目につく。また、この虫こぶがタンニンを含むので染料の材料として使われる。  	
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽初期に隣接ブロックに植栽したネムノキがシカやウサギの被害を受け全滅状態となったが、イスノキへの被害は見られなかった。 植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。 現存率は 75 % であり、植栽から 18 年を経過した現在の平均樹高は 6m 程度まで成長している。	
被 害	葉に袋状の虫こぶ（イスノキアキアブラムシ）が目立つようになった。小枝にモンゼンイアブラムシの虫こぶも散見できる。 植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。 (延べ駆除本数 コウモリガ：1 本、カミキリムシ類：21 本)	

イスノキ 現存率



【現存率】

植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害により枯死が発生している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 74.9%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

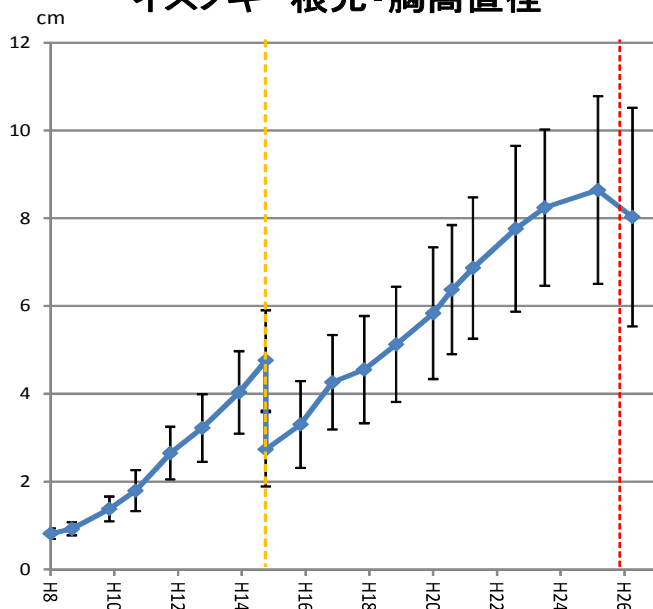
順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 8.03 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

イスノキ 根元・胸高直径



【樹 高】

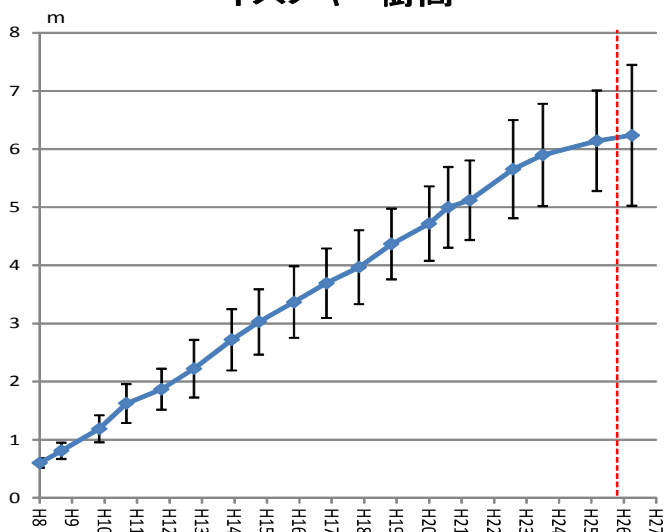
順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 6.24m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



イスノキ 樹高



《プチ情報》

材は乾燥させると非常に堅く丈夫になるので、家具・木刀（示現流系統の剣術で使用されているのは有名）・杖などの材料に、灰（杵灰(いすばい)）は陶磁器の釉の融剤とする。乾燥に強く丈夫なので街路樹として栽培されることもある。

葉にしばしば虫こぶがつく。イスノキコムネアブラムシの寄生では葉の面に多数の小型の突起状の虫こぶを、イスオオムネアブラムシの寄生によっては丸く大きく膨らんだ虫こぶ（ひよんの実）が形成される。

どちらも非常に頻繁に出現するので、これを目当てにイスノキが特定できるほどである。とくにひよんの実は大きくなり、成熟すると表面が硬く、内部が空洞になるので、出入り口の穴に唇を当てて吹くと笛として使える。これが別名ヒョンノキ（ひょうと鳴る木）の由来とも言われる。